【研究ノート】

時枝誠記の「批判」を その史的背景から考える

ソシュール批判と国語学批判は動機を同じくするか

高木　敬生

キーワード：国語学史、言語過程説、一般言語学講義、東京帝国大学国語研究室、言語実体観批判

0．はじめに

アマルティア・センは日本での講義で、「グローバリゼーション即西洋化とみなす誤った判断」を批判し、そうした判断が非生産的であるばかりか、「非西洋社会の自殺行為」にすらなるとした[(1)]。科学的知識のグローバル化に対するそうした抵抗運動の例として、「インド古来の教育には何のメリットも認め」ないトーマス・マコーリーの強硬な西洋化主義に対しての、西洋からの輸入教育論を全て否定したインド伝統教育主義者による反発を挙げた[(2)]。

日本の国語学の成立過程においても、西洋言語学の導入という（植民地としてそれが外部から行われたインドと、自らそれを求めた日本との違いはあるものの）グローバル化が起こる。国語学のグローバル化・近代化の過程においては、西洋言語学が規範とされ、旧来の伝統的日本語研究の蓄積は軽視された。この態度に対し、時枝誠記は反対の姿勢を示し、加えて時枝は、特に1941年の『国語学原論』において、西洋言語学の代表としてF.deソシュールを批判したことにより1940年代から60年代初めにかけての長期にわたる論争を引き起こした[(3)]。彼はそこで「言語学は国語学を外部より推進する処の指導原理であるかの如き観念を強く生み付けてしまった[(4)]」と指摘する。こうして国語学批判と併せてソシュール批判が行われていると見れば、時枝は「指導原理」としての

「言語学」をソシュール言語理論に仮託し、それに対抗する形で国語についての理論として自らの「言語過程説」を提示したとみることができる。

批判の枠組みだけを見れば、時枝のソシュール批判は反グローバル化の延長として理解できるようにも思える。それではソシュールは国語学の規範としての西洋言語学であることを理由に批判されたのであろうか。しかし、その枠組みを単純に当てはめることはできないことは後で明らかになると思われる。また、西洋言語学批判という動機のみでは、時枝のソシュール批判は説明ができないことも指摘されるだろう。それだけでは丸山静が指摘する(5)「なぜソシュールでなければならないのか」という問題への解答として不充分である。本稿では時枝の２つの批判の差異を指摘し、丸山の問いに対する答えを検討する。

論は次のように進める。まず明治維新後の国語学が成立する過程におけるヨーロッパ歴史言語学の影響の大きさを上田万年を中心に概観する。その中で時枝誠記が国語学をどのような観点から批判したのかを確認しよう。次に国語学界においてソシュール理論がどのように受容されたのかについて見る。そしてそれを踏まえた上で、時枝にとってソシュール批判がなぜ必要であったか、その動機と国語学批判との差異とを考察したい。

1-1. 国語学の成立過程

福沢諭吉が文明・半開・野蛮の内、西洋に相対すれば半開にあたる日本は進歩のために「欧羅巴の文明を目的として議論の本位を定め(6)」るべきとしたように、明治維新を境とする価値観の変化は日本独自の文化の価値を西洋文化の下に置くものとなった。この価値観の変化は日本語研究においては、江戸期まで続く日本語研究の伝統の上に西洋の歴史言語学の方法論を半ば無批判に位置付けた。結果としてその方法論に基づいた国語学という新しい学問が成立する。ここでは、明治維新後の日本で、歴史言語学が規範として受容され、国語学が成立する中で、時枝が擁護しようとした江戸期までの国学やそれ以前の伝統的日本語研究がどのように扱われたかについて概観する。

大野（1976）によれば、明治大正期の日本語研究者は４つに大別できるという。すなわち、１．ヨーロッパ人の日本語研究者、２．洋学者（ex. 大槻文彦）、

３．在野の研究者（ex. 大矢透、山田孝雄）、そして４．東京帝国大学博言学科である。特に日本語研究がヨーロッパに由来する歴史言語学を取り入れた研究、すなわち国語学として成立していく上での大きな要因となったものは東京帝国大学博言学科であり、そこに開設された東京帝国大学国語研究室とその開設者である上田万年であろう。

上田は、東京帝国大学で B.H. チェンバレンの指導のもと博言学 philology[(7)] を学び、1890年からは歴史言語学を大成させた青年文法学派が隆盛を極めた時期にドイツ及びフランスに留学している。帰国後の彼の講演「国語と国家と」（1894年）は、国家としての近代化を目指す日本にとって国語の整備がどれだけ重要であるかを説き、国語教育の必要性を主張している。彼は国語を軽んじ外国語を重んじる当時の傾向について以下のように嘆く。

> 悲しい哉、我国にては此日本語は、未だ其受納すべきだけの款待を受け居らざるなり。見よ此不孝不実なる大和男児は、如何に此上に振舞ふかを。（上田、2011: 21）

こうした時勢において上田は近代国家としての国民統合のための言語「国語」を確立しようと、国語学構築の必要を説き、尽力する。上田にとって「漢字廃止[(8)]、標音文字の採用、仮名遣の改訂、言文一致体の使用、標準語の確立などという事業の遂行はそのまま愛国的行動であり、日本語を尊重すること[(9)]」であった。

上田の経歴から言えば、彼は当時においてヨーロッパの歴史言語学に最も可能性を見出していたであろうひとりだと考えられ、それに日本語研究の新規範としての地位を求めたことは必然であった。それでは、日本語研究においては、西洋式の方法論による近代化の波が押し寄せる中で、江戸期の国学までの伝統的日本語研究はいかに捉えられていたのか。当時の言語学（国語学）者らの認識は上田の弟子である橋本の次の言葉に読み取ることができる。

> 國語の研究は既に王朝時代に始まり、その後も引續いて行はれたのであつて、殊に江戸時代に國學者の力によつて著しい進歩を来したのである。従来之を語學と呼んだが、その目的は、主として古典の意味を理解し、又は歌を詠み文を作るに資するに在つたのであつて、言語の研究はこの目的を達する爲の手段たるに過ぎなかつた。（橋本、1970: 2）

この橋本の言葉に見られるように奈良・平安期に始まる「語學」とは元来古典解釈・歌文作成という目的のための実用的関心に基づいた研究であり、言語それ自体についての研究は主目的ではなかった。やがて江戸期の国学者らによって徐々にその関心が古代語自体の理論的構成へと移行する。しかし上田は、国語研究にとっては、そこに前史的な価値は認められるものの、「先輩の功績を充分に認むる事と、先輩の学説を守り奉ずる事とは、全く別の事」であるとして、そうした研究を踏まえながらも「明治の大御世に出た国語学者は、御同様に此大決心の上で、先輩の御弟子となり、学説などの上では、容易に服従せぬ覚悟がなくてはなりませぬ」とする[(10)]。旧来の学説をただ妄信するのではなく、批判的検証の必要を説いたのである。そして旧来の国語研究に対する西洋言語学の方法論の優位性と規範化を主張するのだが、それは彼が本居宣長に代表される江戸期の国学の方法論を否定的に評価する以下の言葉にも読み取ることができる。

> 仮令ば本居翁の様な人は、私共が尤も敬慕する先生ではありますが、しかし其音韻学などに至りましては、今日うけた生理学上、心理学上、言語学上の経験は、まるで其改革を要する事ゆゑ、なんぼ後輩の私なぞでも、最早此点では卑屈的に、翁の説には賛成いたしませぬ。及ばずながら此点は、私共の手で全く自己の新式を建設したいと考へます。（上田、2011: 36）

上田は、伝統的日本語研究者の筆頭ともいえる本居宣長の日本語論も「改革を要する」とし、その一例に「音韻学」すなわち歴史的音変化の研究において西洋の諸学問の見識を導入する必要があるとしている。「新式」建設とはそれ以前の研究の発展というよりも、むしろ断絶が宣言されたに等しい。そしてその「新式」とは西洋言語学に由来したものを想定していると理解できる。旧学説の批判的検証のためにも新たに国語学の創設が望まれ、それにふさわしいものとして西洋言語学の方法論が採用されたのである。こうした立場をとったさらに極端な意見としては、これもまた上田の弟子のひとりであり日本初の国語学史『國語學小史』[(11)] を著した保科孝一が次のように述べている。

> 過去に於ける我邦の言語研究は、殆んど今日の言語學上に貢献すべき結果なしと言つて宜しからうと思ふ（保科、1899: 4）

上田は後に東京帝国大学において西洋式の言語学を取り入れた新しい国語学を指導し、その弟子から新村出、橋本新吉、金田一京助ら著名な日本語学者・言語学者が多数輩出し、時枝誠記もそこに含まれる。後にも見るが、時枝誠記もまた、上田の講義を受けていた時代については、「古典的と考へられた国語学が、近代科学の清新な装をして、我々の前に登場して来るやうに感じられた[12]」と述べ、その当時は歴史言語学を「近代科学」として好意的に受容していたようである。

たしかに、歴史言語学は国語学に利益のみをもたらしたわけではなかった。例えば新村出は、西洋言語学が「國語の新研究を促した」と評価するものの、歴史言語学を受容する側の理解不足が国語学に悪影響を及ぼしたことも指摘している[13]。とはいえ、それはもはや歴史言語学が新規範として普及した結果であり、旧来の日本語研究がその価値の面で国語学の下に位置付けられていたことには変わりはない。

こうした旧来の国語研究否定の裏に見えるものは、先に述べたように、江戸期以来の国学的伝統という規範[14]に対し、西洋の歴史言語学という新たな研究方法を規範とした明治の国語学者たちにおける価値観の転換である。背景にある明治政府は江戸期の鎖国による孤立政策の「知的孤立主義[15]」を脱却し、ヨーロッパから学ぶ姿勢をとっていた[16]。そして日本は自らの内で完結した価値体系から欧米主導世界の価値体系の中へと身を置き直すことになる。その新たなシステムにおいて自らを「半開」と認識し、「文明」に至るための規範を求めることになった。それは言語研究の領域においても同様に取り入れられた。つまり欧米主導世界における歴史言語学という「文明」に相対して、一国家の内における通時的・伝統的な正統性をもった言語研究の規範が「半開」へと位置付け直されたことを意味する。国学的伝統が規範であった時代に対し、西洋歴史言語学という新規範の導入によって新国語学が「文明」的学問として成立したのである。ここに国語研究の通時的継続性は失われ、結果として「半開」の伝統的国語研究は、西洋言語学を規範とする国語学の下位へと価値付けられることとなった。構図的には、学問のグローバル化の過程に対し時枝誠記は反旗を翻したとみることができる。しかし、それはセンが指摘する非生産的な反グローバル化として理解されるであろうか。以下に時枝の批判を考察していこう。

1-2. 国語学批判の動機と言語の本質への問い

前節において、国語学の成立は江戸期以来の伝統の下に新しい方法論を導入するのではなく、それ以前の研究をなかば全否定する形で行われたことを見た。それに対して、時枝誠記は伝統的日本語研究の継承を主張し、国語研究における再規範化を求めることになる。しかし、時枝は帝国大学の国語研究室で上田万年を師と仰いでいたのではなかったか。したがって、先にも触れたように、西洋言語学の影響を受けていないとは言えない。にもかかわらず、時枝はなぜ国語学を批判するに至ったのか。時枝の国語学に対する態度の変化を以下に辿っていきたい。

時枝は上田万年の講義を回想してこのように述べている。

> 研究室や教室が飽くまで古典的であつたのに反して、上田先生の講義が、如何に清新なものに感じられたことであつたか。国語学や言語学の「い」の字も知らぬ私にとつて、国語学といふものが、如何に泰西の近代科学に連るものであるか、国語学や言語学を研究するのに、人類学や生理学や解剖学や音響学や、さては心理学や倫理学や哲学などの研究が、如何に必要であるかといふことが教へられた。(時枝、1976: 21-22)

上田の講義が西洋言語学の流れを汲んだものであることは既に見たが、それは当時の時枝にとって「近代科学の清新な装」として目に映っていた。この影響から時枝は、国語の古い資料からデータを集めるよりも、国語学の周辺の学問から国語学を究めたいという心づもりになっていたという。つまり、彼が上田から得たものは、歴史言語学の方法論よりも、国語研究における他の学問との連携の必要性であった。

時枝はまた大学の卒業論文で国語学史を扱うにあたり、大震災（1923年）の直後に O. イェスペルセンの『言語』（1922年刊）からの影響を強く受けたと述べている。

> 国語に対する意識の展開を明かにすることによつて、わたしの国語観を確立し、それを以て私の国語研究に対する出発点としようとした私の方法論は、今にして思へば、当時、私の読んだイェスペルセン氏の言語学史から受けた恩恵によるものであることを記して置かなければならないと思ふ。(時枝、1976: 32)

ここで着目すべきは、時枝はイェスペルセンの著書において、その言語理論よりも「言語学史」に大きく影響を受けているという点である。この言語学史を学説史として「先輩の筧五百里(いおり)氏と一緒に毎週一回づつ輪講し、深い感銘を受けた」と回想している。しかし時枝がそこから得たものは「知識に関すること」ではなく、「著者が言語学史を言語に関する問題史として取扱つた態度」であった[17]。その態度について時枝は以下のように述べる。

> 私はイェスペルセン氏と共に「言語の本質は何か」の問を発することから始めようとしたのである。そして、その解答を時代の先覚に求めようとしたのである。国語学を国語に対する自覚反省の体系と見るならば、私が今求めようとするところのものは、そのやうな自覚反省の展開史であり、即ちそれは国語学の歴史であり、いはゆる国語学史である。(時枝、1976: 34)

したがって時枝はイェスペルセンからも西洋言語学理論を受容したのではないことが分かる。時枝がイェスペルセンから得たものは、「言語の本質は何か」という国語学が国語を扱うために必要な「自覚反省」であった。換言すれば、言語研究の方法論ではなく、「言語の本質」という言語学の目的において影響を受けたのである。

西洋言語学の方法論は西洋諸言語の本質を踏まえた上での方法論である、とするならば、国語学は、日本語が西洋諸言語と性質を異にする以上、その本質を踏まえた上で方法論を立てねばならない。これが時枝の言語研究の態度である。それに対して、当時の国語学は日本語の本質を探究することなく、日本語に西洋言語学の方法論を当てはめることに専念していたと時枝の目には映ったのである。この点が時枝の国語学批判の動機である。1929年 9 月26日、東京帝国大学の国語研究室会において、時枝は「新しき国語学の提唱」と題し、ヨーロッパ留学の報告を行った。そこでは、西洋言語学の扱う問題や方法が国語研究に従事する者の規範として教えられ、また時枝自身もそのように考えていたことが述べられているが、留学をきっかけに以下のような考えが浮んだという。

> 国語学の問題や方法は、何も、西洋言語学のそれのみを、追ふ必要はないのではなからうか。それよりも国語の事実に直面して、その中に問題を求め、方法を考え

るべきではなからうか。西洋言語学の問題や方法を移して、以て国語学の規範とした啓蒙時代は既に過ぎ去つたのではなからうか。（時枝、1976: 51）

この着想の理由として時枝はこのように述べる。

西洋諸言語と、国語学の対象であります国語との間には、その歴史の点において、また、言語の性質の点において、非常に大きな差があるといふことを認めなければならない（同上）

歴史言語学の方法を規範とする過程で、日本語は西洋諸言語とは歴史も性質も大きく異なるにもかかわらず、それは国語（日本語）を研究するに適切であるか検討されていなかった。こうした国語と西洋諸言語の差異から方法論の見直しを求める態度は時枝に限られたものではなく、例えば山田孝雄もまた同様の態度をとっている[18]。これは方法論ありきで研究対象を定めるという点に対しての批判である。規範としての西洋言語学を拒絶し、対象としての国語の見直しを求め、その上で対象に見合った方法を採用する、これが時枝の「新しき国語学の提唱」である。留学の報告であるという点での言葉遣いの柔らかさに反して、その内容からは国語学への強い批判的態度があることが読み取られる。

確かに、時代背景を踏まえれば、この時枝の態度は非西洋的アイデンティティを謳い西洋を否定する反グローバリズムの態度であるようにも見える。日露戦争（1914年）から大東亜会議（1943年）に至るまでの日本における反欧米意識が高まった時期[19]に時枝は伝統的研究の擁護を行っているのである。そうした背景のもとで、西洋対東洋という意識が、“西洋言語学を規範化した国語学”vs“国学的伝統”という意識となったと言えるかもしれない。こうした姿勢はセン（2017）が挙げたインドの伝統的教育主義者に通じるように見える。しかしながら、時枝が指摘するように、西洋諸言語と国語（日本語）の違いというものが考慮されずに規範化されていたことは、当然の問題点であり、そこに対する批判は、反グローバル化といういわば感情的なものだけではない。

ただし、この研究対象の差異を根拠とした批判は歴史言語学の方法論に対してしか効果を発揮しない。上の引用で時枝が「既に過ぎ去つた」過去の規範だと断ずる「西洋言語学の問題や方法」は、ソシュールの翻訳が現れる1928年の翌年という年代を考慮にいれても、また「国語の系統論、所属論」という点で

も、歴史言語学的な問題・方法である。対して、ソシュール言語学は一般言語学の理論であり、それはまさしく「言語の本質」についての学問である。つまり、言語学の対象である言語それ自体を問うものであり、理念として日本語と西洋諸言語の差異は問題とならない。「言語の本質」の把握が目的という点では時枝もそれに共通する。にもかかわらず、時枝はなぜソシュールを批判する必要があったのか。以下においては、まず先に国語学によってソシュールが受容される過程を確認し、それに対して時枝が加えた批判を見ることでその意図を考察しよう。

2-1. ソシュール言語学はどのように受容されたか

まず、西洋の比較言語学を受容した国語学が、昭和に入りどのようにソシュール理論を受容していくのかについてソシュールの *Cours de Linguistique Générale*（以下 *Cours*）の訳者である小林英夫の言葉を参照しながら検討しよう。

小林は最初に、ソシュールの弟子でありジュネーヴ言語学派の重鎮でもあった Ch. バイイの文体論に対して関心をもったという。そしてその理論の理解のためにソシュールの学理が必須と悟ったため、1927年からソシュールを本格的に研究しだした。彼は神保格が大正後半にはすでにソシュールについて触れていたことを指摘しながら、「それはただ書名を記しただけで、著者［＝神保］の思想にはソシュールをのぞいた痕跡は一つも見出せない」と述べる。そして自身の苦労について以下のように記した。

> この文の読者にここで知っていただきたいことは、当時まだソシュール学説なるものはその片鱗すらも世に紹介されていなかったことである。だからわたしの行為は定義どおり徒手空拳というやつであった（小林、1978: 46）

ただし、時枝によれば、自身がソシュールを知ることになったのは小林の言及と同時期の大正13年、神保に西洋の最新学説として紹介されたことによるという[20]。そして「［神保］氏の言語観念と言語活動との考は、ソシュール学に於ける「言語」と「言語活動」との考に酷似する[21]」と、神保に対するソシュールの影響を主張している。とはいえ、それが日本において最も早い紹介である

かないかは別として、1928年の小林英夫の翻訳によるソシュールの紹介は、国語学において言語の通時的研究から共時的研究への転換のきっかけとなるひとつの事件であった。

しかし上田以来の国語学において歴史言語学という規範を継承した学者らはそれほど好意的にソシュールを受容しなかったようである。小林はソシュールの当時の国語学界における影響について次のように述べる。

> 金田一京助、新村出両先生にも訳書はもちろん拝呈したが、すでに若いころパウルはじめ少壮文法学派の洗礼をうけ、ものを歴史的にみる以外の観点の存在には体質的に拒絶反応しか示されなくなっている老大家たちに「影響」を期待することはもちろん無理であった。(小林、1978: 47)

そのような中で例外的にソシュールに興味を示したのが橋本進吉であった。小林によれば橋本は『言語学原論』(22) の学説に「異常の興味を示」していた。「橋本博士の『国語研究法』や『国文法概説』などにソシュール学説の陰影が色こく出ている」のは、小林が京城から帰国した際に橋本宅を訪れ、ソシュール等の新説を披露した際に、橋本が「親子ほどちがうこの後輩の黄色い口吻に耳を傾け」たことによるという(23)。例えば1946年の橋本による『国語学概論』はソシュールの影響の広がりをうかがわせる。

> ［個別言語学に対して］普通に言語學といへば、かやうな［言語一般に関する問題を研究する］言語學を指す場合が多い。この一般言語學は、各種の言語研究に對して根本概念と一般原則とを與へるものであるからして、國語學の研究も亦之に基づかなければならない。しかしながら、一方に於て、一般言語學に資材を與へるものは個々の言語に外ならぬから、國語學の研究は、また一般言語學に寄與する所があるべきである。(橋本、1970: 6)

上田万年の国語研究室を引き継いだ橋本は、この箇所で「ふつうに言語學といへば」として歴史言語学ではなく一般言語学を挙げており、言語学の意味するものが歴史言語学から一般言語学へと変化しているとわかる。そして西洋言語学を規範的に捉える姿勢にもまた変化はない。国語学は西洋由来の言語研究である「一般言語学」に「基づかなければなら」ず、また個別言語学として資料

提供などで「寄與する所があるべき」であるとするのである。このように明治から昭和にかけて、国語学界が西洋言語学を規範的方法論として導入している点は一貫していると読み取れる。時枝はソシュール批判を展開した『国語学原論』においても次のように国語学者を批判している。

> 明治以後の国語学者は、外部より与えられた理論と方法とを絶対的なもの、普遍妥当なものと考え、自らの力によって対象と取組む勇気を次第に失ってしまった。外来の規範に対する余りにも謙虚な態度によって、却って国語の現実を直視し、これに忠実であることを忘れてしまったのである。かくして国語学と言語学との間に極めて変則的な関係が成立し、言語学は国語学を外部より推進する処の指導原理であるかの如き観念を強く生み付けてしまったのである。（時枝、1941a: 24）

ここまでソシュール学説が日本の国語学界に広く普及したと確認したが、この学説が1920年代後半から30年代までの日本でなぜこれほどに拡散したのかについては、決定的な理由は見出せない。先に小林の言葉に見たように、国語学におけるいわゆる大家たちは、ソシュールよりも依然として比較言語学に規範を求めていた。また、ソシュール学説自体、*Cours* の刊行（1916年）からすぐに欧米で評価されたわけではない。E. F. K. ケルナー（1982: 11）によれば、時枝が影響を受けたイェスペルセンを含み、ソシュールの弟子であった A. メイエ、そしてオーストリアのロマンス語学者 H. シューハルトが、その初版の書評において「好意的ではなかった」という。ケルナーは「実際これ［＝言語学は歴史的研究であること］が、1950年代に至るまでヨーロッパの学者たちが広く共通して懐いていた見解であったように思われる」とも述べる。これを踏まえればソシュール学説は西洋言語学のひとつであったとしても、即座にその代表として理解されるものだとは考え難い。こうした西洋言語学の事情にもかかわらず日本でソシュール理論が普及した理由について、前田英樹・滝口守信は言語の史的変化に特化する歴史言語学の理論だけでは多様化する要求に応えられなかったためであると推測する。

> 主題の多様化、細分化は、改めて言語の本質とは何かを問う切実な動機となっていった。小林の『言語学原論』が登場したのは、学界のこのような雰囲気のなかであり、

それはたちまち驚くほどの浸透力を見せたのである。（丸山、1985: 157-158）

しかし、言語の本質についての考察は、ソシュールの *Cours* が翻訳される以前からイェスペルセンの『言語』などがあった。したがって、それだけでは決定的理由とはならないように思われる。石井久雄はソシュールへの関心を「“Cours” は、国語学者にとっては、言語学に携わっていると自認するための、格好のアクセサリー[24]」だったとすらしている。おそらく、小林による学説紹介の尽力、言語の本質という問題意識の高まり、流行としての西洋言語学、これらに加え、神保等によって国語学者らにソシュール学説受容を可能にするだけの知的基盤が整っていたことなど、これらの要素が複合的に作用したのであろう。いずれにしても、ソシュール学説が一般言語学理論として周知されていたのは、先に見た橋本の言葉からも確かである。そしてまた、当時の国語学において「言語の本質とは何か」を問う機運が高まったとしても、時枝にとって国語学界は再び西洋言語学の学説を「指導原理」としたと映ったのであろう。この意味で、国語学に対しての時枝の批判は一貫している。それは方法論に合わせて対象の輪郭を定めようとする転倒した関係が原因である。時枝の国語学批判は、西洋言語学批判を原因としてのそれを国語学が採用したが故のものではなく、そもそもの国語学者たちの姿勢に対する批判なのである。こうして、国語学への批判は西洋言語学への批判とは区別されることが確認された。それでは西洋言語学（ソシュール）への批判は何を動機とするのであろうか。

2-2. ソシュール批判と国語学批判

繰り返しになるが、時枝の明治以降の国語学に対する批判は、対象よりも方法論が先行し、方法に合わないものを対象から排除するという姿勢にあった。批判の矛先は自身で対象を考察することなく外部から指導原理を導入するという姿勢に向いているのである。以下の引用においてそれは明示されている。

明治以後の学者が、旧来の研究を批評するには、常に一定の尺度が用意されてゐて、それによって、公式的に裁断するといふ方法がとられた。その一定の尺度とい

ふのは、近代言語学の水準であって、その水準に合つたものは、価値ある研究とされ、それに合はないものは、非科学的として斥けられた。このやうな批評の方法を、私は正しくないとした。（時枝、1957: 135-136）

既に上で見た橋本の言葉と併せても、歴史言語学から一般言語学への移行はありながら、依然として西洋言語学の方法を規範とする国語学者らの姿勢は変わっていない。しかし他方で、時枝のソシュール批判[25]は国語学者への批判とは異なることを確認した。歴史言語学の方法論に対する批判は、日本語と西洋諸言語の差異を考慮しない点が理由にあった。ところがソシュールに対する批判は、個別言語の差異は問題とならないため、その論理からの否定はできない。さらには「言語とは何か」という問題意識の点でソシュールと時枝は共通する。それを以下に確認しよう。

Cours の「言語学史一瞥」は、ソシュールが自身より前の時代のヨーロッパでの言語研究を時代ごとに簡潔に評価したものである。そして彼以前の言語研究の欠点のひとつとして「研究対象の本性を明らかにする」ことがなかった点を挙げている[26]。それを踏まえて、ソシュールは言語の「本性」を明らかにした上での言語理論構築を目指した。つまり、その研究姿勢は時枝・ソシュールの両者異なるところはない。それでは、時枝のソシュール批判の動機はどこにあるのだろうか。それはシュール理論の「ラング langue」概念を批判することである。

時枝は卒業論文[27]において言語の特質を「表現運動」に求めた。この「運動」すなわち人間の行為としての言語こそ、時枝が伝統的国語研究の歴史から見出したものである。対して時枝が批判するソシュールの言語概念すなわちラングとは言語記号の価値を設定するところの差異の体系である。

［記号の価値について］以上に述べてきたことは要するに、言語には差異しかない、ということに帰する。それだけではない；差異といえば、いっぱんに積極的辞項を予想し、それらのあいだに成立するものであるが、言語には積極的辞項のない差異しかない。所記をとってみても能記をとってみても、言語がふくむのは、言語体系に先立って存在するような観念でも音でもなくて、ただこの体系から生じる概念的差異と音的差異とだけである。一個の記号のうちにどのような観念または音的資料があるのかということは、それがどのようなぐあいに他の記号に取りまかれて

いるかということに比べて、あまり重要でない。（ソシュール、1940: 168）

「積極的辞項のない差異」とは、すなわち差異化することによってはじめて対象が確定されるということを意味する。言語記号について大切なことはその記号がどのような意味をもつか、どのような音で表現されるかということではなく、その記号を他の記号と区別せしめる差異とは何か（「どのようなぐあいに他の記号に取りまかれているか」）である。この差異の網目が織りなす体系内において各記号が占める位置をソシュールは価値と表現した。そしてこの体系すなわちラングはその特質のひとつに個人に対する外在性を持つ[28]。このようなソシュールのラング概念が、言語行為全体ではなくそれに用いられる「実体」のみを対象としている点で、時枝は批判するのである。

言語過程説が、言語を、〈人間の表現・理解の行為である〉と規定する時、先づ対決を迫まられたのは、過程説とは全く異なった仮説理論である言語実体観であります。それは、近代言語学の根本理論で、言語を、〈音韻と意味との結合体である〉とする考へ方であります。（時枝、1965: 49）

時枝は、西洋言語学を受容した国語学が「言語構成主義[29]」の立場をとるとした。それは研究対象である言語を音声と概念とから構成されるものとして見ることで、人間の表現行為から切り離し、言語を使用する主体を無視した言語実体観であると批判する。「実体的なラングの概念」を「言語経験の歪曲した客体化」としてソシュールは批判される[30]。そして、それに対抗する形で、言語を「主体的な活動それ自体」としてみる言語過程説が提唱された。それは言語を人間の行為としてみる研究、さらに言えば言語生活を対象とする研究である。

言語は、行為であり、活動であり、生活である。それは、次の等式によって示される。

言語＝言語行為＝言語活動＝言語生活

右の等式の示すものは、言語があって、それとは別に言語生活があるという考えを否定することを意味するのである。（時枝、1955: 28-29）

この理論は「言語」を人間の生活の一部として扱うのに対して、ソシュール理

論はラングを前提とした「具体的な経験から離れることになる」方法とされる。ここに両者の相違点がある。しかしながら、言語とその実践とを切り離す言語観、時枝のいう「言語実体観」はソシュールに始まったものではない。たとえば青年文法学派の中でも国語学において広く受容されたH. パウルの『言語史原理』における「言語が歴史的に成立したこと」という言葉は、個々人を超え、それ自体が変化していく史的対象として言語を捉えた結果であると読める[31]。また「言語の個人的な活用」、「一般的な言語の慣用に対する個人の態度」という表現は個人に外在する道具的な言語観を示しているように見える。また、さらに前の世代のA. シュライヒャーのように、言語を生物になぞらえる言語有機体説は、それだけ取れば、まさに言語構成主義の一種として挙げられるだろう[32]。時枝自身も構成的言語観がソシュール独自のものではなく「近代言語学」の特性であると見ている。

> この考へ方に従ふならば、言語は、人間の外に存在する、一の実体的なものと考へられるのは当然で、ソシュールは、これを〈ラング〉と呼んで居りますが、この考へ方はソシュール独自のものといふよりは、近代言語学の本来的なものと見ることが出来ます。（時枝、1965: 49）

それではなぜ、時枝はソシュール理論のみを具体的に批判するだろうか。それは時枝の理論それ自体が、実は *Cours* の批判的読解によって成立していることに他ならない。例えば時枝は言語過程説における「言語」を次のように説明する。

> そこ［＝具体的な経験に基礎を置く言語研究］では、言語は客体的な思想内容を音声に結合し、文字に記載する主体的な心的作用として、又音声より思想内容を理解し、或は文字より音声及び思想内容を理解する心的作用として把握されているのである。換言すれば、言語は精神的実体でなくして、人間行為の一形式として見られているのである。（時枝、1973: 365-366）

これは *Cours* において、「言語活動事実における言語の位置[33]」と題した一節に対応するものである。そこでは、言語行為は心的な現象（聴取映像と概念の連合）・生理的過程（発話・聴取）・物理的過程（音波の伝播）からなると分析

される。コミュニケーションはこれらの過程の二主体間における循環であるから、それはパロールの回路 le circuit de la parole と呼ばれる。ソシュールはラングの所在を「聴取映像と概念が連合する場所」に置いた。

時枝は「ソシュールはその研究の出発点において、「言循行」[「パロールの回路」と同じ]の名において、個人間の会話を観察の対象としたことは正しいことであった[34]」とパロールの回路の観察に一定の評価を示す。しかし、「言語を、それと関連する人間行為全体から切離して、専ら言語自体の構造を抽象的に観察したに止まった[35]」と批判するのだ。とはいえ、これは結局のところソシュールが打ち出したコミュニケーションの図式を踏まえて、ソシュールがラングと呼ばなかった部分を研究するとしたに過ぎない。「正しいことであった」のも、自らがソシュールの図式を採用したという証左となる。これについて服部（1957）は時枝がソシュールを翻訳のみによって理解したため用語レベルでの誤読が多いことを指摘した上で、言語過程説における「言語」はソシュールの「ランガージュ」に近いものであると指摘[36]した。また、それを受けて石井（2007）はソシュールと時枝の違いを「重視するのがラングであるかランガージュ[37]であるかというところに落ち着く[38]」とした。また大橋（1973）は、*Cours* において個々の話者から抽象される言語（記号）を entité（実在体）としたソシュールが、その点において青年文法学派（歴史言語学）とは対立することを指摘して、そのような実在体を認めず具体的・個別的な言語行為のみを見る時枝が青年文法学派と立場を同じくし、ソシュールとは異なるとされる。しかしながら時枝と青年文法学派の大きな相違点である「共時論的展望」がソシュールからの影響である可能性もまた指摘されるのである[39]。

以上の点から、時枝は、言語が「表現運動」であるという自身の着想を理論化するために、ソシュールの影響を強く受けたと言えるだろう。それゆえ、時枝のソシュール批判の動機は、歴史言語学の方法論や国語学者らに対する方法論と対象の転倒関係を動機としては理解できない。そうではなく、言語過程説によるソシュール理論の乗り越えという、学問レベルでの純粋で自然な動機でしかないことが分かる。しかし、この動機を認めるならば、それは時枝の理論が、もはや伝統的国学由来の国語研究ではなく、むしろソシュールという近代言語学の影響の延長線上に成立した理論であるがゆえの動機ということになるだろう。

3．おわりに

時枝誠記の国語学に対する批判とソシュール批判とは動機を異にすることが確認された。

彼の国語学批判は構図や時代背景からは反西洋・反グローバル化という半ば感情的な動機によるものと同じく見える。しかし実際には１で見たように、それは明治に新設された国語学が西洋言語学の方法論を無批判に導入し対象たる国語をそれに合わせようとして、研究対象と研究方法の関係を逆転させているという学問的姿勢への批判であった。また、そこに付随する歴史言語学の方法論導入への批判は日本語と西洋諸言語との差異を考慮しない点が問題とされた。

それに対してソシュール学説は、一般言語学として「言語とは何か」という問題意識を立てた点で時枝と共通しており、歴史言語学の方法論への批判とは必然的に異なるため、さらに考察を必要とした。時枝のソシュール批判はラング概念への批判、すなわち言語観の対立に起因する。ソシュールのラング概念は言語を実体として人間の生活から切り離されたものとして時枝には理解され、「主体的な活動それ自体」であり「具体的な経験」としての言語を主張する言語過程観と対立するものであった。しかし、言語実体観はソシュールにおいて初めて現れるものではなく、歴史言語学においても同様の言語観は確認される。ここにソシュール批判の動機の謎があらわれた。本稿ではそれを純粋に学問的な動機、すなわちソシュール理論を言語過程説によって乗り越えようとしたことにあると見た。そして、この動機は、時枝がソシュールの方法論を批判しながらも、実際にはその影響を強く受けていることの裏返しであると理解される。

時枝の批判を動機によって区別することにより、明治期の国語学の問題点が明らかになるとともに、時枝自身がソシュールの強い影響下にあったこともまた指摘されるのである。

参考文献

石井久雄（2007）「昭和前期の国語研究におけるソシュール」、『国語論究 第13集 昭和前期日本語の問題点』明治書院、pp.252-271

入江昭（2014）『歴史家が見る現代社会』講談社（講談社現代新書）
上田万年（2011）『国語のため』安田敏朗校注、平凡社（東洋文庫）
大野晋「日本語研究の歴史（2）—明治以降—」、大野晋・柴田武編（1976）『岩波講座 日本語Ⅰ 日本語と国語学』岩波書店、pp.231-274
大橋保夫（1973）「ソスュールと日本 服部・時枝言語過程説論争の再検討（上）」、『みすず』15巻8号、みすず書房、pp.2-15
風間喜代三（1978）『言語学の誕生』岩波書店
加藤周一（1999）『日本文学史序説（上）』筑摩書房（ちくま学芸文庫）
ケルナー（E.F.K.）（1982）『ソシュールの言語論　その淵源と展開』山中桂一訳、大修館書店＝原著：Koerner, E. F. K.（1973）*Ferdinand de Saussure: origin and development of his linguistic thought in Western studies of language: a contribution to the history and theory of linguistics*; Vieweg
小林英夫（1978）「日本におけるソシュールの影響」、『言語』vol7-3、pp.44-49
新村出（1943）『言語學序説』星野書店、京都
セン（アマルティア・）（2017）『アマルティア・セン講義 グローバリゼーションと人間の安全保障』筑摩書房（ちくま学芸文庫）
ソシュール（F. de）（1940［1972］）『一般言語学講義』小林英夫訳、岩波書店（1928『言語学概論』小林英夫訳、岡書院）＝原著：Saussure, F. de（1916［1922, 1969］）*Cours de Linguistique Générale*, publié par Charles Bailly et Albert Séchehaye, Éditions Payot & Rivages; Paris
時枝誠記（1940［2017］）『国語学史』岩波書店（岩波文庫）
————（1941a［2007］）『国語学原論（上）』岩波書店（岩波文庫）
————（1941b［2007］）『国語学原論（下）』岩波書店（岩波文庫）
————（1951）「言語の社会性について—大久保忠利氏の「言語過程観批判の序説」に対する答をも含めて」、『文学』19(9)、岩波書店、pp.75-84
————（1955［2008］）『国語学原論　続篇』岩波書店（岩波文庫）
————（1959）『現代の国語学』有精堂出版
————（1965）「言語過程説の成立とその展開」『国語学』（60）、国語学会、pp.47-54
————（1973）『言語本質論』岩波書店
————（1976）『時枝誠記博士著作選Ⅱ 国語学への道』明治書院
パウル（ヘルマン・）（1965［1993］）『言語史原理』福本喜之助訳、講談社＝原著：Paul, Hermann（1880）*Principien der Sprachgeschichte*, Max Niemeyer; Halle
橋本新吉（1946［1970］）『国語学概論』岩波書店
服部四郎（1957）「言語過程説について」、『國語國文』26(1)、中央図書出版社、pp.1-18

福沢諭吉（1995）『文明論之概略』岩波書店（岩波文庫）
保科孝一（1899）『國語學小史』大日本図書
丸山圭三郎編（1985）『ソシュール小辞典』大修館書店
丸山静（1968）「言語理論について」『文学』9. vol.36、岩波書店、pp.1-9
安田敏朗（2018）『近代日本言語史再考 V ことばのとらえ方をめぐって』三元社
山田孝雄（1935）「自序」『國語學史要』岩波書店

註

（1） セン、2017: 27
（2） Cf. セン、2017: 28-29
（3） 丸山、1985: 158-159
（4） 時枝、1941a: 24
（5） 丸山静、1968: 5
（6） 福沢、1995: 29
（7） 現在の「文献学」に同じ。philology は「博言学」の他、ヘボンによる「原語学」、西周による「語源学」などの訳語が当てられていた。チェンバレンはそれを専門としておらず、比較言語学（歴史言語学）を教えたという。Cf. 安田、2018: 29-30
（8） ここでの「漢字廃止」はすべての表記に仮名あるいはローマ字を用いるという極端なものを意味するのではなく、漢字の節減（表音文字使用の増加）という部分的な廃止を意味する。
（9） 大野、1976: 259
（10） 上田、2011: 36
（11） 保科のこの著作は日本初の国語学史ではあるが、上田万年の講義によるところが大きいと言われている。Cf. 時枝、1959: 42、大野、1976: 258
（12） 時枝、1976: 22
（13） 「言語學が日本の國語研究の上に益したよりも、比較言語學の研究を忽諸に附したやうな方法論上の誤謬が頻繁に犯されたのも事實である」（新村出、1943: 441）
（14） 日本において文化、言語の中心は常に各時代の大都市（平安期～室町期までの京都、徳川期以降の東京）文学的階層に担われていた。Cf. 加藤、1999: 10-46
（15） セン、2017: 32
（16） 五箇条の御誓文に「知識ヲ世界ニ求メ」とある。
（17） Cf. 時枝、1976: 33

(18)　山田（1935: 2-3）は「今の國語學といふものは明治の中頃に西洋の言語の學問が輸入せられて来てから、それらに説く所の理法に國語をあてて説かうといふのが主眼になってゐる」ことが引き起こした欠陥として、「わが國語は西洋の言語と性質も歴史も違ふからして、西洋の言語の理法をそのまゝあてて説いて見ても正鵠に中らない點があり、又西洋の言語に全く見えない現象もあるから、國語の學問として、隙間だらけのものである」と述べている。

(19)　入江は当時の反欧米意識を次のように表した：［欧米の帝国主義による犠牲者としての］アジアのイメージが現実の国際関係にも反映されるようになるのは、戦前の日本が唱えた大東亜共栄圏の構想である。それは西洋の勢力や影響を追放して、アジアの運命をアジア人の手で作っていこう、という考えであった。（入江、2014: 143）

(20)　時枝、1976: 90

(21)　時枝、1941a: 75

(22)　*Cours* の翻訳は、最初『言語学原論』として岡書院が出版。その後、1940年に岩波書店から改訳新版が出され、1972年に現在の『一般言語学講義』となった。

(23)　小林、1978: 47

(24)　石井、2007: 257

(25)　時枝のソシュール批判の評価について触れると、それはソシュール理論の誤解に基づいたものが多いと言えよう。例えば、時枝（1940: 41）は「ソシュールは「物をいう事」を言語活動（langage）と名づけ、「いわれる物」を言語（langue）と名づけた」とするが、これはラングとパロールの区別と混同されていると言えよう。服部（1957）や大橋（1973）にも見られるように、時枝のソシュールの誤読は原語を当たらなかった（小林訳に拠った）ことによることが指摘される。

(26)　Cf. ソシュール、1940: 13-15

(27)　「日本ニ於ル言語観念ノ発達及言語研究ノ目的ト其ノ方法（明治以前）」本文 p.6

(28)　ソシュール、1940: 27

(29)　時枝は、ソシュールの言語概念が音声と概念とから構成されるとして、それを言語構成主義と呼ぶ。言語実体観なども同様の意味ととらえられる。もちろんこのソシュール理論の理解はソシュールのラング概念と記号概念を混同しているという点で誤っている。

(30)　時枝、1940: 257

(31)　時枝もまた、パウルにおいて「類推作用によって創作せられる「物」としての言語が考えられていた」点を批判している。（時枝、1941: 41）

(32)　服部（1957: 3）は比較言語学者において言語を人間と独立した「物」と見る傾向があったことは認めつつも、シュライヒャーが「言語を個人に外在する物体と考

えていなかった」とし、パウルについては「更に反省的となって」いたことを指摘している。

(33)　ソシュール、1940: 23-28

(34)　時枝、1951: 77

(35)　時枝、1955: 11-12

(36)　服部、1957: 7-8

(37)　「言語［ラング langue］は、われわれにしたがえば、言語活動［ランガージュ langage］から言を差し引いたものである。」（ソシュール、1940: 110）

(38)　石井、2007: 261

(39)　大橋、1973: 15